

# はじめに

「松くい虫被害」として知られている松類の枯死被害は、我が国の松林を激しく蝕み、荒廃をもたらしました。古くからの被害地である西南日本では、集中的な防除が行われている一部の海岸松林等を除き、成熟した松林が見られなくなってしまった地域も存在し、松くい虫問題はすでに「過去のこと」のように思われているかも知れません。しかし、そのような場所でも景観上あるいは防災上重要な松林は必ず残っているはずです。また、被害拡大の前線にあたる高緯度、高標高地域には今なお広大な松林が維持されています。松くい虫問題は決して「過去のこと」などではなく、今後とも防除対策の必要性・重要性が失われることはありません。

樹皮下穿孔性昆虫（外樹皮と材の間の“内樹皮”と呼ばれる軟らかい組織を食い荒らす昆虫の一群）による食害が原因とされていた松くい虫被害が、そのような昆虫の一種であるマツノマダラカミキリによって媒介される病原体マツノザイセンチュウによる伝染病であると判明したのは1970年代のことでした。かつての名残で「松くい虫」と呼ばれてきた

松の枯死被害ですが、正式には「マツ材線虫病」と命名されており、本冊子での呼称もこれにしたがうことにします。なお、行政用語ではマツノマダラカミキリを指して「松くい虫」と呼んでいることがあり、注意が必要です。

病原体の発見以降、マツ材線虫病についての研究は国内外の研究者により精力的にすすめられ、防除についても2000年頃までには体系化された技術が示されるようになっていました。その後も新たな知見の蓄積がすすむ一方、社会情勢も大きく変化し、防除対策もそれに応じた見直しが必要になっています。この小冊子は、近年の科学的な知見や社会情勢の動向にも目を配りつつ、マツ材線虫病被害対策の基本的な考え方や技術を解説したものです。マツ材線虫病対策に取り組む行政や森林組合職員の皆さまに加え、ひろく松くい虫問題に興味をお持ちの方々のご参考になれば幸いです。

2022年3月

国立研究開発法人森林研究・整備機構

森林総合研究所東北支所

産学官民連携推進調整監 中村克典